

# 大学パンフレットの比較分析 —関東地方の私立大学を対象として—

曹 婉瑩

日本では、少子化は今深刻な社会問題の 1 つになっている。文部科学省の「学校基本調査」のデータから、大学進学率に大きな影響を与える 18 歳人口は 2019 年より未来の 2031 年では、約 14.2 万人が減少すること、特に 2023～2024 年の 1 年の間で 3.5 万人と大きく減少することが分かる。また、近年において、大学進学率がいちじるしく上昇している一方、大学生数はそれほど増加していないのは現状である。この現状を踏まえて、国内における大学経営は非常に厳しくなることは言うまでもない。今後、いくつもの大学が経営危機に陥って、学生募集の停止に踏み切らざるを得なくなったり、周辺の大学間での統廃合が頻繁に起きたりして、厳しい状況に迫られる大学が相次ぐだろう。

このような背景を踏まえて、本研究は、関東地方の全私立大学を対象とし、大学のタイプごとに宣伝でアピールしている自らの特性を明らかにすることを目的とする。これによって、少子化が進行し、定員割れを起こす中で、今後の私立大学の学校運営に対する示唆が得られると考えられる。

本論文では、関東地方（東京都、茨城県、群馬県、埼玉県、栃木県、神奈川県、千葉県）の全私立大学の 226 校を研究対象とし、それらの同年度における大学案内のパンフレットを分析の情報源とした。各大学について、主に①研究対象校の概要、②パンフレットの概要、③パンフレット全体の特徴という 3 点から分析を行った。

分析を通じて結果から得られた知見を 3 点に絞って整理した。まず、単科大学と総合大学の違いである。総合大学のパンフレットの平均ページ数は、単科大学の約二倍となる。数だけではなく、内容の違いも見られた。総合大学のパンフレットの内容は豊富で幅広く色々な種類のトピックが含まれるのに対して、単科大学は内容が単調で特定なトピックに対して丁寧で詳細に扱う傾向がある。第二は女子大学と共学との比較で見られる違いである。対象校の大学、特に女子大学は、高校生の大学選択行動の特性を把握した上で内容と各トピックの重要度を意識して作成していることが推測される。最後に、地域別ページ数の比率に関するものである。研究対象となる関東地方の各地域の私立大学の数と種類に大きい違いが見られたにも拘わらず、パンフレットの各トピックの分量の比率はほぼ同じとなっている。

今回の研究ではパンフレットのみを情報源として使ったが、得られた知見はあくまでパンフレットの中のアピールしたいポイントであって、それのみで大学の傾向のすべてがわかるものではない。同じ役割を持っている大学のホームページなどを含めて比較と検討を行うことによって、より詳細な知見を得ることができると考えられる。

(指導教員 芳鐘冬樹)